

64 道三の姓「曲直瀬」と玄朔の号

「東井」に関する考察

遠藤次郎・中村輝子・真柳 誠¹⁾

¹⁾ 東京理科大学薬学部

²⁾ 茨城大学人文学部

演者の一人、真柳は、かつて道三の姓「曲直瀬」の由来について検討を加え、これが「東方（日本）の瀬（流れ）」の意味であることを推定した。本発表では、これをさらに裏付ける史料を見出したので報告したい。また、二代目の玄朔の号「東井」についても、上記の問題と関連していることから、同時に検討を加えた。

武田科学振興財団杏雨書屋に、一五八六年、道三八〇歳の折の著作『脩意撮要』が所蔵されている。本書は七〇丁より成り、道三の直筆本である。内容は朱丹溪の『丹溪纂要』をもとに編纂されたもので、跋文は以下のように記されている「①丹溪纂要伝義。②右の一部、余少壯以来、凡そ六十年、晨昏詳にこれを閲

す。而して、華素に出入して、貴賤を診療し、病にして瘳さざる者無し。今や門中学士のために脩（朱丹溪の号、彦脩）意の妙用を撮集して、即ち丹筆を以て審に考勘を加うるのみ。③千皆天正十有四丙戌年（一五八六）上巳日、④利陽に在ては則ち曲直瀬、洛に帰りては一溪叟道三、満八十歳これを書く」（原文、漢文）

跋文の④の記述にはいささか驚かされる。我々は道三はずっと「曲直瀬」を名乗っていると思ひ込んできた。事実、「曲直瀬」姓は次世代にも受け継がれている。しかし、道三は、「曲直瀬」は関東留學時までで、京都に帰ってからはこの姓は名乗らなかつた、と主張している。そのつもりで道三の多くの医書を再検討すると、帰洛後の医書は「一溪」「盍静翁」「雖知苦齋」「寧固」等の号を用い「曲直瀬」は使っていない。一時、「曲直瀬」を「真瀬」に変えたといわれているが、これも定着した形跡はない。

道三のもとの姓は「堀部」で、「曲直瀬」は道三自身が作った姓である（曲直瀬ハ道三ノ名字也。私ノツクリ名字也）『延寿院切紙』この姓がいつ頃作られたの

かは不明であるが、導道が道三に授けた印可状の中にこれが見出されることから、関東留学の時代にに使われていたことは確かである。帰洛後、これを使わなかった理由は、「曲直」に東の意味を持たせていたことから、東国から帰った後は、意にそぐわなくなったと解すことができる。ただし、道三が「曲直瀬」を名乗った時は、京都に対する東国の意味ではなかったと考えられる。遠藤、中村はすでに「曲直瀬」、「一溪」の姓について再考し、道三が自ら朱丹溪の流派であることを強く主張していたことなどから、「曲直瀬」は中国における朱丹溪の流れに対する東の日本での支流の意味であり、「一溪」は朱丹溪に源を持つ一本の溪流の意味である、と推定した。八〇歳になっても道三が朱丹溪に私淑していたことが『脩意撮要』から、うかがうことができる。本書の最後の「利陽にあつては曲直瀬、帰洛後は一溪叟道三」(④)の記述の中に、自分が朱丹溪の流れを汲む日本の瀬であり、導道、三喜の死後は、自分が日本で唯一丹溪の流れを汲む者であるという自負を感じることができる。なお、自分の姓を作ったり

使わなくなったりする背景には、道三が本来姓を持たない僧侶であったことと関連しよう。あるいは、号名として使っていた「曲直瀬」がいつのまにか姓になつたと考えられる。

二代目玄朔の号「東井」についても「曲直瀬」の命名と関連づけて考えることができる。玄朔の号「東井」は、一般には「トウセイ」を読まれる。ところが、真柳が見出した台湾故宫博物院所蔵の『啓迪集』関連の医書の中では、これを「トウイ」と訓じている。もしこれが正しいとすると「東井」は「東医」で、「曲直瀬」に近い意味を有すると解し得る。もとは、「東井」を「トウイ」と読んでいたものが、「トウセイ」と読まれるようになった理由は、初代道三自身が、帰洛後「曲直瀬」を使わなくなったことと関連づけて考えることも可能であろう。